

私たち高校生が東日本大震災を経験したのは小学校2年生のときだ。大きな震災を経験し、その後も防災教育を受けてきたため、防災について「知ったつもり」になっていた。皆さんは、東日本大震災と聞いてどのような被害を思い浮かべるだろうか。多くの人は津波と答えるだろう。しかし、先日の講演会に参加してメディアに取り上げられなかっただけで実際には地滑りやブロック塀の倒壊などの内陸部での被害も多かったのだと知った。講演会に参加しなければ、私はこの事実を知ることはなかっただろう。仙台が未来の防災都市だというのなら、多くの仙台市民はこの事実を知っておくべきではないか。特に私たち高校生は未来の仙台を支えていく立場である。先日の講演会では町内会長をやられているような方々の参加が多かった。これは、地域の中では防災についてよく考えられているということだ。しかし一方で、若い世代の防災への関心が少ないということでもある。若い世代の人が町内会の集まりに積極的に参加し、防災について知ることが大切だと思う。

私は、高校の授業の一環で災害について研究している。私の班の研究ではないが、ほかの班の研究で「街道では津波の被害が少ないのは本当か」というテーマがあった。この研究の結論は、「被害が少ないとは言えない」というものだ。その理由の一つとしては、そもそも街道の認知が正しくないことが挙げられた。街道への被害が少なくてもその街道がどこかを正しく認知されなければ避難のしようがない。

このように、「知らない」ということは防災をするうえであってはならない。2015年に採択された仙台防災枠組の優先行動にも、災害のリスクを理解し、共有することという項目がある。この防災枠組も、どれだけの仙台市民が知っていることだろうか。現代はインターネットやパンフレットなどで災害について知ることができる。また、災害は地震だけに限ったことではない。仙台が未来の防災都市であるので、私たちは知らなければならぬことがたくさんある。私たちが災害に対して関心を持ち、後の世代へも伝えていくことが未来の防災都市を支えていくカギとなるだろう。